



9月20日(水)、車でラウリー駅に、そこから通勤鉄道と言われるジーゼル機関車でボストンの北駅に、そこから地下鉄に乗り継ぎ、ハーバード・スクエアに到着。アメリカ最古のハーバード大学(1636 創立)は、広々と緑の芝生が伸び、木立の中に伝統を感じさせる赤い煉瓦の建物が並ぶ広大なキャンパスです。ハーバード大学と聞いただけでドキドキしてしまうのはなぜかしら。まずは創立者の銅像の前で記念の一枚。私の英米文学科のクラス担任だった江口裕子先生の母校でもあります。先生は美しく、目に鋭い光が宿り、威厳に満ちていました。

ホーソン、ポーなどのニュー・イングランドの作家の作品を紹介してくださいました。

ジョセフ・ヒコもハーバード大学に関係しています。ヒコが親とも慕うサンダース氏が金融恐慌で倒産、20 歳のヒコも恐慌の影響で全く職を得られず、苦境にあった時、ボストンに住む T.G. ケアリー氏という見知らぬ人から、「どんな風になっているか、金の必要があれば、融通する」との手紙を受け取り、天からの贈り物と感激します。ケアリー氏はヒコがサンフランシスコで働いていた時の友人トマス・ケアリーの父親でした。ケアリー氏の申し出もあり、ヒコは道が開かれていき、22 歳で帰国を果たします。2 年後にボストンのケアリー家を訪ね、トマスの義兄アガシー氏に紹介されます。彼はハーバード大学の生物学、地質学の学者でした。ヒコは彼に頼まれ、日本からいくつかの標本を彼に送りました。それがハーバード大学に保存されていました。

稲垣さんはそのリストを市沢氏に送り、事前に市沢氏はハーバード大学のピーボディ博物館、比較動物学博物館に閲覧申し込みの予約をして下さっていました。この閲覧は特別に許可されたもののようです。学芸員の方が準備して待っておられました。

<p>鎖帷子 (ピーボディ考古学・民俗学博物館)</p>	<p>マツカサウオ (魚類学)</p>	<p>オキナガイ・メダカラ (軟体動物学)</p>

稲垣さんはヒコが送った品物が、160 年余の時を経て、ヒコの名前と共に保存されていることを喜び、感激しきりでした。学芸員の方々は丁寧に標本を見せて、熱心に説明してくれました。

ヒコの送った物で行方不明、廃棄された物もあるようです。でも、これらは日本人による最初のハーバード大学への標本提供です。また、トマス・ケアリー、彼の父ケアリー氏、義兄のアガシー氏らの、漂流民で、孤児であり、貧しいジョセフ・ヒコに対する「良きサマリア人」のようなアメリカ人の親切の証です。

